

ジョン・ラスキンの「ガイド」と J. P. フォーンソープの「索引」

花 角 聡 美

はじめに

本論文は、「ジョン・ラスキンと J. P. フォーンソープ——『フォルス・クラヴィゲラ』の索引をめぐる」(『英米文学研究』第 57 号、2022 年)にて論じた考察をもとに、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819–1900) とジョン・ピンチャー・フォーンソープ (Reverend John Pincher Faunthorpe, 1839–1924) の索引をさらに検証する。ここで議論の対象となるのは、『フォルス・クラヴィゲラ——イギリスの勤労者と労働者への手紙』(*Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers in Great Britain*. 1878–1884; 以下、『フォルス』あるいは *Fors* と略記する) であり、また『フォルス・クラヴィゲラへの索引』(*Index to Fors Clavigera*. 1887; 以下、『フォルスへの索引』と略記する) である。

前号で紹介した手紙のやり取りから、ラスキンとフォーンソープの二者の間で『フォルスへの索引』に対する姿勢が共有されていなかったことが明らかになった。索引作成に対して前のめりであったフォーンソープに対して、「必要なのは索引というよりはむしろ、貴殿の [女学校] の聡明な娘さんたちのために貴殿が持ちたいと思われるような『ガイド』」である、というのがラスキンの考えであった。1883 年から 1885 年にかけて、また 1885 年 3 月の手紙から索引が完成するまでの間に、2 人が意見を交わした記録が現在のところ見当たらないため、制作過程における両者の思惑の全貌は明らかではない。ただ一つははっきりしていることは、ラスキンは『フォ

ルスへの索引』に満足していなかったということである。フォーンソーブが自身の信念を貫いて作成した一冊は、ラスキンの「望まぬやり方」で、フォーンソーブの「強欲さと自惚れ」が垣間見え、「ペンを突き刺したくなるような」仕上がりであった (qtd. in O’Gorman 54)。こうして意見を異にする両者の間には、「ガイド」というキーワードが見えてきた。

本論でも引き続き、鍵を握るのは一般財団法人ラスキン文庫（東京都中央区）に所蔵されている複数の資料、特に『フォルス・クラヴィゲラ』8巻本とその索引である。これらの資料にはいずれもインクによるメモが書き込まれ、新聞記事の切り抜きが数点添えられている。本稿ではこれらの貴重な手がかりをもとに、ラスキンとフォーンソーブが、それぞれ「ガイド」と「索引」に込めた意図を探っていきたい。

「ガイド」と「索引」

フォーンソーブは、ラスキンに助言を求めた割にはラスキンのやり方（ラスキン流の索引の原理）に対して疑問を抱き、独自の流儀を強引に押し進めたようにも感じられる。しかし当然のことながら、彼の根底には作品への索引を作りたいと願うほどの熱意に加え、ラスキンに対する心からの敬意を持ち合わせており、ラスキンによる索引を否定しているわけではなかったという事実は、『フォルスへの索引』に見え隠れしている。

ラスキンとフォーンソーブ、両者の索引をより深く探るため、ここで具体例を参照する。用いる資料は全部で4つある。①ラスキン自身が編集した索引で、『フォルス』8巻本の第2巻末に収められているもの。第1書簡から第24書簡までの索引 (Ruskin, *Fors Clavigera*. Vol. II)。8巻本の第2巻末に“Index to the Volumes for 1871 and 1872”として収録されており、ページ数は本文を含めず索引のみに付されたもの。②フォーンソーブが作成した『フォルス・クラヴィゲラへの索引』 (Faunthorpe, *Index to Fors Clavigera*.)。③クック (E.T. Cook) とウェダバーン (Alexander Wedderburn) によるライブラリー版ラスキン著作集第29巻に収められている「ラ

スキン索引」(Ruskin's Index) (29. 609–676)。④ライブラリー版ラスキン著作集の『フォルス・クラヴィゲラ』(著作集第 27–29 巻)。これらを見比べることで、興味深いことが見えてきた。

上記のうち①と②、ラスキンとフォーンソーブの索引作成の大きな違いとしては、1つの語彙に参照箇所が複数ある場合、ラスキンはアルファベット順、フォーンソーブが書簡の順になっている点が挙げられる。また、フォーンソーブ版では、自身が序文で断りを入れているように、「～を参照せよ (see …)」として語句の相互参照を促す箇所が非常に多い印象を受ける。

ライブラリー版のテキストから、ラスキンが目指す「ガイド」の片鱗が見られることは、すでに述べている通りである。『フォルス』第 1 書簡から第 24 書簡まで (著作集第 27 巻) の数ページに、“Index to Vols. I. and II.”の記載とともに、原注として記されている項目があり、これらは上述の③では、“[For a note added by Ruskin]”と記されている。“Index to Vols. I. and II.”とはどういうことなのか。第 2 巻末に索引が収録された『フォルス』8 巻本をを参照することで明らかになったのは、ライブラリー版著作集にて注記されている項目は、もともとラスキンが注釈 (原注) として付けたわけではなく、索引の中で加えた文章だということである。月刊として発行された当初から、原注も複数見られるが、④著作集の注釈で“Index”の表記のあるものは、それには該当しない。さらに面白いことに、こうした文章による説明は、上述②のフォーンソーブ版で、“Note from Old Index”としてほぼそのまま掲載されているのである。ここまでの説明に該当する十数点の語句について、書簡の順に詳細を挙げると次の通りである。④の著作集を基準にして紹介する。

(1) “royalty” (27.29,297): 29 ページでは、①の“royalty”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 23) が掲載されている。②では“*Note from Old Index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe,

Index. 382)。一方 297 ページには、①では“obedience”にある説明文が掲載されている (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 19)。①で“loyalty”と引いてみると、“see obedience”と表記されている (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 17)。②の“obedience”には、①の“obedience”がそのまま引用されているが、“Old Index”という出典明記がない (Faunthorpe, *Index*. 327)。また、④でも“see also obedience”の記載はあるものの、③ではラスキンによる注釈があることを示す“[For a note added by Ruskin]”との表記はない。なお、29 ページと 297 ページの注釈の文章は一部重複している。

(2) “Richard” (27.54): ④では、① (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 22) とは若干異なる文章が、原注としてではなく編者による注釈として掲載されている。②には“Richard I”の項目はあるものの、①、④のいずれとも一致せず、引用を表す明記もない (Faunthorpe, *Index*. 376)。

(3) “science” (27.85): ①の“science”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 23) が掲載されている。②では“*Note from Old Index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 399)。

(4) “man” (27.85): ①の“man”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 17) が掲載されている。②では“*Note in Old Index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 293)。

(5) “love” (27.90): ①の“love”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 16–17) が掲載されている。②では“*Note from old Index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 288)。

(6) “army” (27.185): ①の“army”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 3) が掲載されている。“Index to Vols. I. and II.”の表記が無いが、原注ではなく編者による注釈として掲載されている。②には①の“army”がそのまま引用されているが、“Old Index”という出典明記がない (Faunthorpe, *Index*. 13–14)。

(7) “artist” (27.186): ①の“artist”の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 3) が掲載されている。②では文章は一致するが、アスタリスクでページ下部に掲載

するのではなく、項目の中に組み込まれ、(*Note from old index*) と表記されている (Faunthorpe, *Index*. 15)。

(8) “working men” (27.186,187): ①の “working men” の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 28) が掲載されている。②では順序を書簡順に並び替えているものの、内容が一致。“*Note from Old Index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 487)。別途 “work” を “Note from Old Index” としてページ下部に記載しているが、他の項目に見られるような文章による補足説明は見当たらず、④への掲載もない。

(9) “religion” (27.194): ①の “religion” の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 22) が掲載されている。②では文章の一部 (“of all the forms of submission to a Supreme Being”) がイタリックに変わっている。そのほか内容は変わらず、“*Note from Old Index*” としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 371)。

(10) “St George’s Company” (27.323): ①の “Guild of St. George” (“George”; Ruskin, *Fors.* Vol. II. 11) の文章が原注としてではなく編者による注釈として掲載されている。②では “Guild of S. George” の “vol. II” の項目の中に組み込まれ、“*Note from old Index*” と表記されている (Faunthorpe, *Index*. 206)。

(11) “classes” (27.260): ①の “classes” の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 6) が掲載されている。②では、“and” をコンマに、ダッシュを括弧に、“3rd” を “third” に、という細かい変更のほかはそのまゝ。アスタリスクでページ下部に掲載するのではなく、項目の中に組み込まれ、“*Note from old Index*” と表記されている (Faunthorpe, *Index*. 94–95)。

(12) “imagination” (27.346): ①の “imagination” の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 14) が掲載されている。②では “*Note from old Index*” としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 241)。

(13) “faith” (27.347): ①の “faith” の文章 (Ruskin, *Fors.* Vol. II. 9–10) が

掲載されている。②では、1 箇所コロンがコンマに変わっているほかはそのまま。②では“*Note from old index*”としてアスタリスクにてページ下部に小さな文字で記載されている (Faunthorpe, *Index*. 157)。

これらの共通項に加え、ここで触れるべき項目が2つある。著作集では注釈が付けられていないが、フォーンソープが引用しているものである。

(14) “Giotto”: ①の“Giotto”の文章に、さらに第25書簡以降の追記があるほかはそのまま (Ruskin, *Fors*. Vol. II. 11–12)。②“*Note from old Index*”として組み込まれている (Faunthorpe, *Index*. 195)。

(15) “squire” (27. 30–31): ②では、『フォルス』本文 (第2書簡) からの2箇所の引用と共に、“squire”の文章 (Ruskin, *Fors*. Vol. II. 24) が掲載されている。(Faunthorpe, *Index*. 433)。

以上が、ラスキンが作成し8巻本 (第2巻) に収められた索引と、フォーンソープが作成した索引、そして著作集の本文 (注釈) で共通部分が見られる箇所である。上記を並べてみると、フォーンソープによる出典明記の曖昧さが見えてきた。ラスキンの文章を引用した箇所を、アスタリスクにてページ下部に掲載する項目がほとんどであるのに対し、項目として組み込まれている箇所がある。また、“*Note from Old Index*”の表記にしても、イタリックとそうでないところがあり、“old”と“index”の頭文字は大文字・小文字が統一されていない。誤記もあり、“man”の内容に至っては“from”が“in”に置き換わってしまっている。

こうした統一感の無さが生じてしまったことについて可能性のある理由は、フォーンソープが索引を作る過程で、彼以外の人物の手が関わったということである。ビショフによれば、彼はホワイトランズ校の学生、妻の手を借りており、アルファベット一つにつき一人のアシスタントがいたようである (Bischof)。もちろん著者としてフォーンソープの概念が根底にあることは間違いないが、出典明記の方法が他と大きく異なる項目の頭文字がいずれも“A”であることを考えると、アルファベットごとに別の制作過

程をたどり、最終的に表記が統一されないままに出版に至ったのではないかと考えられる。こうした一貫性のなさが、ラスキンを満足させられなかった原因の一つとなっているかもしれない。

ラスキンは『フォルス』第2巻に収めた索引(第1書簡から第24書簡に対する索引)の中で、ただ単に該当ページを示すだけではなく、本来は本文の脚注として付けるような文章を書いていた。このように、明らかに文章と見られるものは、すべてフォーンソーブや編者によって取り上げられ、上記に挙げた通りである。ラスキンが必要だと感じていた「ガイド」は、おそらくこうした項目を増強させることだろうと考えられる。しかし、フォーンソーブが作成した『フォルスへの索引』は、このような語句の解説はラスキンによる文章を引用(転載)するに留め、新たに解説を加えている箇所は見当たらない。つまり、ラスキンが自身の手で文章を付け加えた第24書簡までは解説が付与されているが、第25書簡以降にはそれが無いのである。二者間のやり取りにてラスキンはガイドを膨らませたいことを仄めかしていたが、その点でラスキンの願いが叶うことはなかった、と言えるだろう。

資料の紹介

フォーンソーブがラスキンの助言通りに作成したわけでもなく、あくまでも「索引」として完成させた一冊の中で、最も目を引く特徴的な項目であり多少なりとも女子学生や労働者たちにとって手引きとなる、「ガイド」を連想させるような項目が存在する。それが「聖書」(“BIBLE: quoted, referred to, commented on, or newly translated”)である。

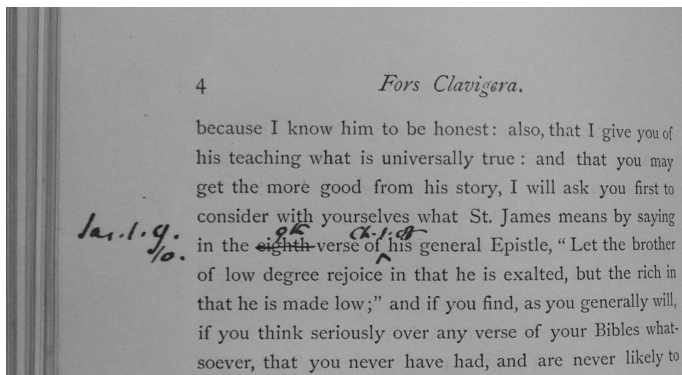
著作集第27巻の序文でクックが記しているように、フォーンソーブの索引では「聖書」に11ページ(Faunthorpe, *Index*. 54–64)割いており、それでもなお完全ではない(27. xxxiv)。11ページにわたり記載されている内容は、『旧約聖書』の「創世記」に始まり、『新約聖書』の「黙示録」に至るまで、該当する章・節が『フォルス』のどの書簡に関連しているか、一

覧で表記されている。「聖書（引用、言及、コメント、訳）」となっているが、引用や言及の別は細分化されず、書ごとに一括りである。

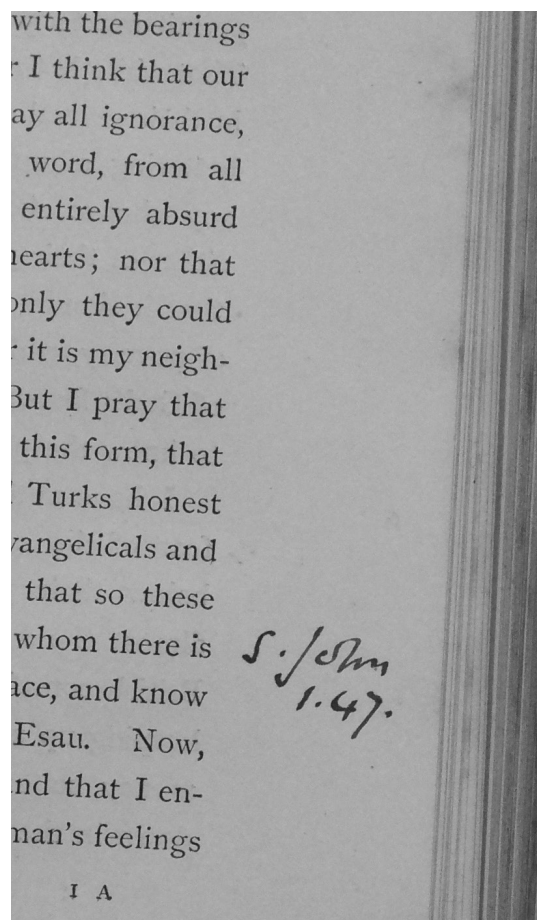
「聖書」にページ数を割いていることは明らかだが、並々ならぬ力を入れていたであろうことは、フォーンソープの肉筆として残されている。ここで再び、御木本コレクションの一部を紹介する。前号の繰り返しになるが、『フォルス・クラヴィゲラ』の8巻本および索引は、御木本隆三氏が渡英し、「ロンドンラスキン協会長、故フォーンソープ教授の蒐集されしもの」（御木本16）を、古書として購入したものと考えられる（川端161）。8巻に加えて索引にはそれぞれインクによる書き込みが残されており、筆跡を照合することで、フォーンソープのものであると推定できる。（米国ウエルズリー・カレッジのアーカイブ及び『ジョン・ラスキン書簡集』を参照。）8冊の本の中には別の人物の署名（記名）も見られることから、発行されてから一貫してフォーンソープの所有物ではなかった可能性を排除できないが、上述のようにフォーンソープが収集し、彼がメモを書き加え、最終的に御木本氏の手によって日本に持ち込まれたと考えるのは十分自然なことである。

まず、『フォルス』本文である8冊に残された書き込みの一部を紹介する。いずれも8巻本『フォルス』の第3巻（第30書簡、pp.3, 4）である。

[資料①]



[資料②]



この画像はあくまでも8冊ある本の2ページに過ぎないが、他のページにも同様に、上下左右の余白部分に複数の書き込みが見られる。内容は主に、聖書、ギリシア語（ギリシア古典文学）、シェイクスピアの作品等、出典に該当するものである。編者の指摘通り、フォーンソープの索引が全てではないにしても、書き込みの中でも特に聖書に関する表記は膨大な量であり、

これらを実際に索引と照合してみるとほぼ一致する。これらの書き込みがなされた時期を特定することが難しく、必ずしも索引の出版前にこうした作業を行っていたと断定することはできないが、仮にこうした作業が索引出版後であったとしても、書き込みの量と索引のページ数から考えるに、「聖書」という項目にかなりの重きが置かれていることがわかる。著作集に収められる際に注釈として出典が明記されているが、それまで聖書の参照箇所を明記したバージョンは出版されていないため、いずれにしてもフォーンソープは本文から全ての文言を抽出し、該当箇所を索引にまとめたことになる。

ではなぜ、フォーンソープがこのように聖書に力を注ぎ、多くのページを割いたのか、考えられる理由は2つある。

まず1つ目には、ラスキンが聖書に精通していたことが挙げられる。ラスキンといえば、幼少期には厳格な福音主義者の母親のもと、日課として「創世記の第一節」から「黙示録の最終節」に至るまで、音読をし、暗記していた人物である(35. 14, 40–41)。当然のことながら、「おそらく彼ほどに聖書の知識を身につけた人は19世紀のイングランドには存在しないだろう」と言うほどである(Wheeler 166)。このように聖書の重要なくだりが頭の中に全て入っているラスキンが書く文章は、自然にそこからの引用が組み込まれていることが多く、聖書の知識が十分ではない人物にとっては、それらが聖書をもとにした言葉だと気づくことは難しいものである。ラスキン本人は、聖書の文言と自身の言葉とを、意識的に区別していなかったのではないだろうかと思われる。著作集には編者によって註が加えられているものの、8巻本には註はおろか、引用符さえ使われていない箇所も少なくない。第30書簡から具体例を2つ示す。

第1セクション：“… but in that of a glass in which a man — beholding his natural heart — may know also the hearts of other men, as in a glass, face answers to face (27. 545) . この部分は「ヤコブ書 (James 1:23)」

“for if any be a hearer of the word, and not a doer, he is like unto a man beholding his natural face in a glass” を基にしている。

第3セクション: “... that so these Israelites in whom there is no guile” (27. 547) . この部分は「ヨハネの福音書 (John 1:47)」: “Jesus saw Nathanael coming to him, and saith of him, Behold an Israelite indeed, in whom is no guile!” を基にしている。

いずれも聖書と一字一句違わず、ということではないが、ラスキンの文章の中に自然に組み込まれている。引用符が用いられている箇所もあるが、多くの場合において、このように言及もなく聖書の文言が登場する。ここに挙げた二例は、索引にも掲載されている。

2つ目の理由は、“Reverend”の称号が示すように、フォーンソーブがホワイトランズ校の校長でありながら、聖職者であるということである。フォーンソーブはホワイトランズ校の学生たちに、「預言者の一人として[ラスキン]を尊敬するよう」、そして「19世紀というのは、主にラスキンが生き、執筆をおこなった時代として記憶されるだろう」と説いていた(Hilton 443)。聖書という要素無しにラスキンの教えを学ぶことは不可能であり、読者がラスキンの教えに触れると同時に聖書に触れ、その理解への助けを提供することを、聖職者である自身の務めとして認識していたと考えられる。フォーンソーブ自身は索引を作るほどにラスキンの著作を深く理解していただろうが、同時に『フォルス』の一般読者に近い視点を持ち、聖書に関して言及が必要だと感じる場面が多くあったのかもしれない。労働者にしても女子学生にしても、ラスキンには到底知識が及ばないことを踏まえると、索引や注釈により聖書の該当箇所が示されることは、有益であったものと推測できる。

1881年にラスキンがフォーンソーブに宛てた手紙によると、『フォルス』は女子向けに書かれたものではない」ために、ホワイトランズ校への寄贈が一度は見送られている(Wise, Vol. I 47–48)。しかし結局のところ女

子学生たちは『フォルス』を入手し、読んでいた (Bischof)。そうした姿を間近で見ながら、そんな学生たちに「ガイド」が必要なのだとすれば、それは聖書をより深く理解するためのものであるべきだ、と感じていたのかもしれない。

さらにもう一点付け加えると、ラスキン文庫に所蔵されている『フォルス』8巻本への書き込みの調査から、ある可能性が浮上した。先述の通り索引中のアルファベット1つ分を一人のアシスタントが担当していたというのであれば、8冊の本にフォーンソープが写真のようなメモを書き込み、それをアシスタントの人物が拾い上げてまとめた、という可能性も考えられるのである。書き込みがなされた時期、前後の文脈を探るとともに、これらの謎をさらに解き明かすことは今後の課題である。

編者序文に記されたメモ書き

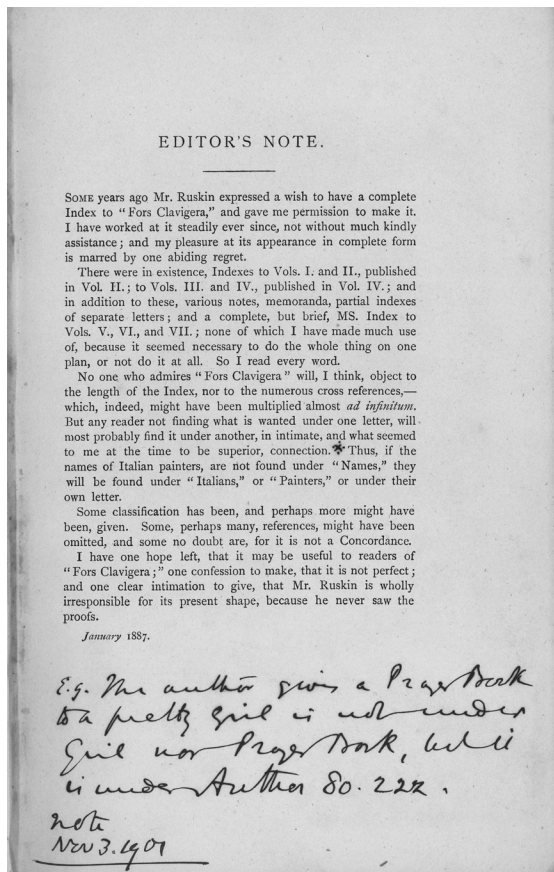
前章で触れた「聖書」と同じように、着目すべき項目がもう一つある。それは「長々と続く『著者』の項目」であり、ラスキンが名指して批判している (qtd. in O’Gorman 54)。この項目は30ページと明らかに長く、他の項目とは比較にならないほどである。著者というのはもちろんラスキンを指すわけだが、「ラスキン」の項目はわずか5行に収まり、「セント・ジョージ基金、注釈と書簡、手紙、著者を参照せよ (see S GEORGE’S FUND, NOTES AND CORRESPONDENCE, LETTERS, and AUTHOR)」との記載がある (Faunthorpe, *Index*. 383)。この中の「著者」に特に力を入れたのはラスキンへの強い敬意ゆえのことなのだろうか。索引から一部を抜粋すると、以下のようなものである。“[Author] asked to write a letter to boys, 78, 176.”; “[...] gives Marylebone property [...], 78, 170.”; “[...] recommends Liverpool to buy ..., 79, 194.”; “...gives a Prayer-Book ..., 80, 222.” (Faunthorpe, *Index*. 37; 37ページより4つを抜粋) このように逐一ラスキンの行動が記され、また、少しでも著者が関わっている事柄であればこの項目に入れられており、この30ページだけでごく簡

単なラスキン年表が作成できそうなほどである。

1つの項目が必要以上に長いというのは、実は他の項目にも見られることであり、ラスキンにも指摘されていることである。「著者」は8巻本それぞれを分割し、“vol. I”から“vol. VIII”として小項目を立てている。こうした表記は他にも15項目で見られる。そもそも索引の記載が書簡順なのだから、ここまで細かく分ける必要があるのか疑問に感じるところだが、「著者」を含めた16項目が、フォーンソーブが重要だと認識していた語句であることは間違いないだろう。

しかしながら、長いということは、上述のように語句と内容の関連性が低いものが含まれてしまうということである。これはつまり、索引としての機能に問題が生じるということでもある。この点については、本人にも自覚があったのかもしれない。ここで再度、フォーンソーブが書き残したメモを紹介する。ラスキン文庫に所蔵されている『フォルスへの索引』の「編者による序文」のページである。

[資料③]



E.g. The author gives a Prayer Book to a pretty girl is not under Girl nor Prayer Book, but it is under Author 80.222.

note

Nov. 3. 1901

例) 著者が可愛い女の子に祈祷書をプレゼントしたという内容は、“Girl”でも“Prayer Book”でもなく、“Author”(80.222)にある。

記

1901年11月3日

アスタリスクが書き込まれているのは、目当ての項目が見つからなければ別の項目を参照するよう促している部分だが、その具体例を挙げるとメモの通りである、ということの意味している。先ほどから議論している「著者」がまさに例として挙げられている。この表記通り、資料のようなメモを残したタイミングが1901年11月と言うことならば、ラスキンがこの世を去ってから既におよそ2年が経過しており、『フォルスへの索引』が出版されてからは10年以上になる。ラスキンの著作全集が編纂される際、自身の索引が参照されることを期待したのか、それともラスキンを回顧しているのか。いかなる理由であれ、索引を出版したことで完結するのではなく、フォーンソーブはその後に関心を失っていない様子が伺える。しかし、「祈祷書」に関連する箇所を調べたいと思う人が、索引で「著者」を引こうとするだろうか。確かに使い勝手が良い索引とは言えないし、この書き込みから半年後、1902年5月には新聞にて酷評を受け、そして反論を展開することになる。

ラスキン文庫所蔵の『フォルスへの索引』には、見返し部分に2つの新聞の切り抜きが貼り付けられている。この記事が掲載されているのは、1902年5月の『セント・ジェイムズ・ガゼット』(*St. James Gazette*)の中で、文学を扱った“Literary World”の欄である

まず5月17日の記事では、“Mr. Wheatley”による指摘として、出来の良い索引には「タトラー」と「スペクテイター」を例に挙げ、その一方で『フォルス・クラヴィゲラ』の索引の配列(編纂)が良くない(“the bad arrangement of the index to ‘For Clagivera’”)ことが述べられている。例として『パンチ(Punch)』が「ロンドン(London)」に含まれていることを挙げ、『パンチ』に関するラスキン氏の見解を知るために『ロンドン』を引く人がいるだろうか。」と言われている。(“Who, for example, would seek Mr. Ruskin’s opinion of ‘Punch’ under the heading ‘London?’”) (*St. James Gazette*, 17 May, 1902. p.17)。実際に新聞記事に引用された「ロンドン」は、以下の通りである。

London, — Fifty square miles outside of, demoralized by upper classes
 — its middle classes compare unfavourably with ape
 — some blue sky in, still
 — hospital named after Christ's native village, is
 — honest journal of, "Punch."

これらは複数ある「ロンドン」の項目のうちの5つに過ぎないが、見出し語と内容の関連性の低さを提示しているものと思われる。これに対して5月21日には、この指摘がいかに「的外れ」であるかを述べたフォーンソープの言葉が掲載されている。

Now, in the Index "London," to which there are about 90 references in "Fors," occupied pages 283-4-5-6, and the references are given in the order of the volumes 1 to 8, but the above five are respectively the 12th, 20th, 32nd, 45th, and 79th, so that it is not quite fair to "quote" them as if they were consecutive. ... it is also highly probable that no one would seek Mr. Ruskin's opinion on "Punch" under the heading "London," but under its own heading where, of course, he would find it. Mr. Ruskin himself was angry because he could not find "Pig" in the Index, whereas it was not *Pig* that he wanted, but "Benick's" Pig, which is duly indexed. (*St. James Gazette*, 21 May, 1902. p.17)

〔索引中の「ロンドン」には『フォルス』の中での90の参照箇所があり、238ページから286ページにわたり、第1巻から第8巻の順に掲載している。しかし、上記[5月17日]での「London」の引用は、それぞれ12、20、30、45、79番目の参照であり、連続する項目でないのだから、これを「引用」とするのは公平ではない。…『パンチ』に関するラスキン氏の見解を探ろうと「ロンドン」を引く人はいない可能性が高いだろうが、もちろんそれ自体を見出し語として見つけることができる。ラスキン自身、索引で「豚」を見つけないことができないことにご立腹だったが、彼が求めていたのは「ベニック」の豚であり、これは然るべき項目に掲載されている。〕

ラスキンのエピソードも踏まえて、いかに自身の索引が理に適ったものであるかを主張している。確かにフォーンソープの言うように、「パンチ」の項目にも全く同じ記載があるため、そちらを先に参照すれば目当てのものが見つからないことはないだろう。「豚」に関して補足すると、“Bewickian pig comforts author, 48, 270.” (Faunthorpe, *Index*, 54) の記載があり、さらに、「著者」の項目に同じ内容として “(author) fails to draw Giotto’s ‘Poverty’ at Assisi, and is comforted by Beweckian pig, 48, 270.” (Faunthorpe, *Index*.) との記載がある。書き込みのある『フォルスへの索引』には、54 ページの “pig” に丸印が付けられ、その横にはバツ印のような印が書かれており、これはおそらく新聞記事に反応してのことだろう。またしても「著者」、そして「豚」について探すには難しい配置である。この記事の最後は次のように締めくくられている。

The Index does not profess to be perfect, although it represents the labour unpaid of about two years of a man’s life.

THE COMPILER

(of the Index to “Fors Clagivera”) . (id.)

〔この索引は、一人の人間が無償で費やした 2 年間の結晶だが、完璧であることを自称しているわけではない。〕

(『フォルス・クラヴィゲラ』への索引の) 編者

索引は完璧なものではない——これは『フォルスへの索引』の序文で語ったことと重なる部分がある。批判を受ければ反論はするが、一方で、完成時にラスキンから受け取った、怒りの滲む手紙が頭から消えなかったのかもしれない。

この 2 つの記事や書き込みからわかることが 2 点ある。まず一つには、フォーンソープの索引を良しとしなかったのは、ラスキンだけではないということである。実際に索引を使った人物が、上述のような感想を述べて

いるのである。この意見が多数派であると断言できるわけではないが、索引の根本原理が否定されているというのは、見逃すわけにはいかないだろう。そしてもう一つに、フォーンソープは自身の索引の出来に誇りを持っていたということである。新聞という多くの人の目に触れる場所で貶されたことで自尊心が傷つけられたのかもしれないが、自身の信念に絶対的な自信がなければこのように言い返すことはしないだろう。

2年の歳月を費やして完成させた大作だが、ラスキンだけでなく他者からも指摘を受けるように、索引としての原理、機能が称賛に値するものだったとは言えない。しかしながら、1887年の刊行後にも書き込みを増やし、新聞での世間の評価を気にするなど、索引への情熱が燃え尽きることがなかったと考えて間違いないだろう。

最後に

本稿で論を展開するにあたり、読者に自分の考えを理解させることを優先事項とするラスキンに対し、索引を作ること自体が目的になっているフォーンソープ、という構図が見えてきた。全集の編者であるクックとウェダバーンによれば、「索引を作成することは彼[ラスキン]にとって、そして教えること (teaching) のためにできる最善の務め」だったようである (39. xiii)。この概念が反映されたのが、「ガイド」的要素であるものと見受けられる。ラスキンは「ガイド」への布石とも取れる語句の解説を付け加えていたわけだが、頑なに自身の原理を通したフォーンソープがラスキンのそうした思いを汲み取ったようには見られない。フォーンソープはラスキンに意見を求め、索引に関する思いを引き出すことはできたものの、その意向を反映させた索引を完成させたとは言えないし、意志を引き継いで「ガイド」的要素を膨らませたとも言い難い。「聖書」に並々ならぬ力を入れ、「著者」では手に取った人の混乱を招くほどにあらゆる要素を詰め込み、索引としての根本原理を批判されれば反論する——『フォルスへの索引』の序文から受ける印象とは異なるものが見えた。デニス・ダンカン

索引とは「何百マイルも離れた場所にいる 2 人が、偶然同じタイミングでそれ [ある概念] に出くわすために存在する」ものだという (Duncan 55)。フォーンソーブの索引は、その役割を果たしているだろうか。読者の理解を助けようとするのがラスキンの「ガイド」だとすれば、自身の信念を持って尊敬するラスキンに 2 年間でささげた成果が、ラスキンが揶揄する「ホワイトランズ・インデックス」と言えるのではないだろうか。

* 本稿は、一般財団法人ラスキン文庫より、所蔵品の閲覧許可および掲載許可をいただいたことにより執筆することができました。秋山康男代表理事、図書係の柴葉子さんにお礼申し上げます。

参考文献

- Bischof, Christopher. “‘Fors Clavigera,’ the Young Women of Whitelands College, and the Temptations of Social History.” Richmond School of Arts and Science. <https://scholarship.richmond.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1034&context=history-faculty-publications>. Accessed 16 Dec. 2022.
- Duncan, Dennis. *Index, A History of the*. Dublin: Penguin, 2022.
- Faunthorpe, J. P. *Index to Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain*. by John Ruskin. Vols. I to VIII. Orpington, Kent: G. Allen. 1887.
- . “Letter from John P. Faunthorpe, Chelsea, London, England, to John Ruskin, Brantwood, England: autograph manuscript signed, 1881 April 5.” *Wellesley College Digital Repository*. <https://repository.wellesley.edu/object/wellesley31183?search=autograph%2520manuscript%2520signed%2520C%25201881%2520April%25205>. Accessed 16 Dec. 2022.
- Hilton, Tim. *John Ruskin: The Later Years*. New Haven: Yale UP, 1985.
- O’Gorman, Francis. “Ruskin, Faunthorpe and *the Index to Fors Clavigera*.” *English Language Notes*, 35. 3, March 1998, pp. 52–58.
- Ruskin, John. *Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers in Great Britain*. London: George Allen, 1872.
- . *The Works of John Ruskin*, 39 Vols. Ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. London: George Allen, 1903–12. (本文中では「著作集」と略記する。)
- St. James Gazette*. London: 17th and 21st May, 1902.
- The New Testament of Our Lord and Saviour Jesus Christ: Authorized King James Version*. Cleveland.
- Wheeler, Michael. “Environment and Apocalypse.” Michael Wheeler ed. 164–86. *Ruskin and Environment: The Storm-Cloud of the Nineteenth Century*. Manchester:

Manchester UP, 1995.

Wise, T. Thomas. *Letters from John Ruskin to Rev. J. P. Faunthorpe, M.A. Vol. I.* London: Privately Printed. 1895.

——. *Letters from John Ruskin to Rev. J. P. Faunthorpe, M.A. Vol. II.* London: Privately Printed. 1896.

川端康雄、『ウィリアム・モリスの遺したもの——デザイン・社会主義・手しごと・文学』岩波書店、2016年。

財団法人ラスキン文庫『ラスキン文庫蔵書目録——御木本隆三旧蔵書』1986年。

『ジョン・ラスキン書簡集』（英文版）(*Ruskin's Letters in the Mikimoto Collection*)、ラスキン文庫、1994年。